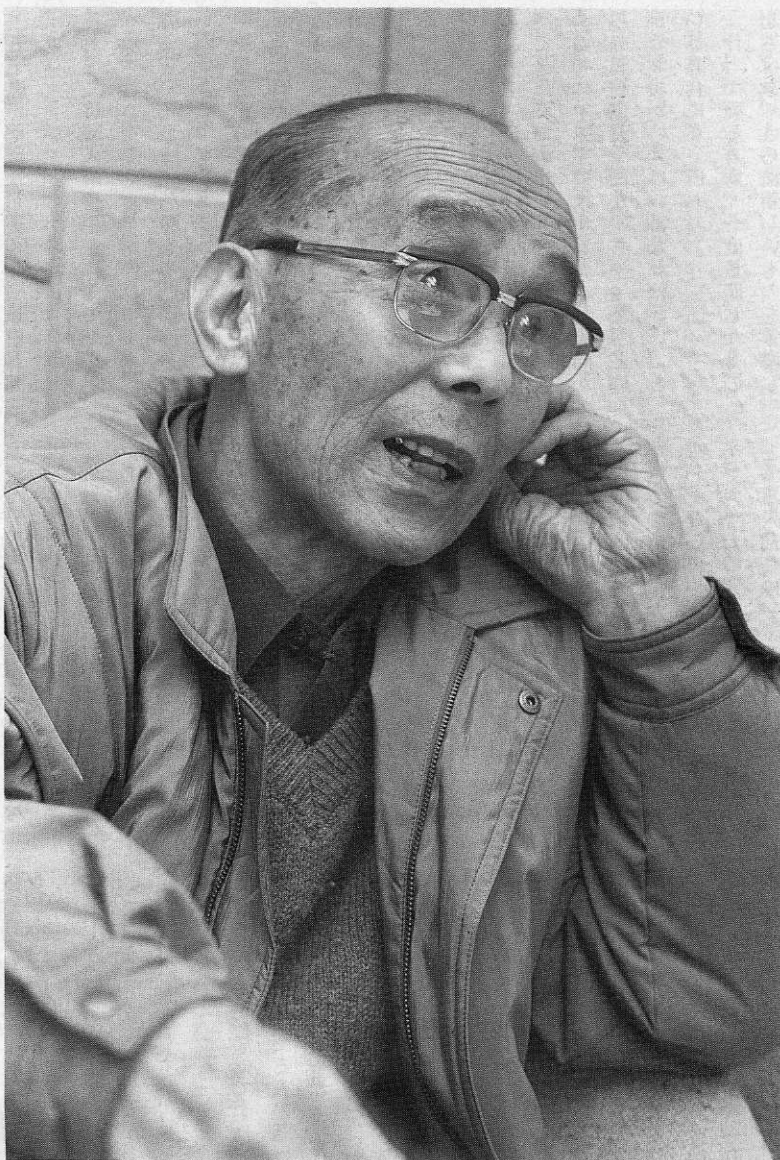


日本釣り場論 ②

このままいくと
日本の釣り業界は滅亡します

ゲスト・**五十嵐忠造**……いがらし・ちゅうぞう
元つるや釣具店・店主



↑五十嵐忠造さん。1913年生まれ。2年前まで東京・京橋にあった“つるや釣具店”は日本の釣具店の老舗中の老舗だった。そのつるや釣具店の創業者。あらゆる釣りに関わってきたが、日本のフライフィッシングはつるや釣具店からはじまったといっても過言でない。

今、日本の釣り場の中で、年々状態がよくなる可能性をもつ釣り場が果してあるだろうか。もちろん、単純に魚が釣れば良いということなら、多大な放流によってかろうじてその点を満す釣り場はあるだろう。しかし、それはどこが違う。

釣り場は、公共の豊かな自然の中にあってこそ、その意義も価値も高まる。日本の釣り場が今日のような状況になってきた原因はいろいろ考えられ、思い浮かぶ。その点において、日本の釣具業界を考えるとどうなのか？ 釣具業界は釣り場や釣りそのものを向上させる働きをしているのか？ あるいは釣具業界から今日の釣り場や釣りそのもののあり方を見ると、いったいどう見えるのか？ 五十嵐忠造さんに聞いてみた。

グラスとカーボンの出現が
日本の釣りをかえた

——五十嵐さんは昭和初期から釣具店をはじめられて、戦後は東京・京橋で“つるや釣具店”として営業を続けてこられ、2年前に閉店なさるまでフライフィッシング用品を先駆的に扱ってこられたことや、鮎竿やへら竿をはじめとするいろいろな種類の一級の竹竿を扱われてきたことでも有名ですが、戦後、釣具業界の様子が変化してきたのは、いつごろからですか？

五十嵐 やはりグラスロッドやカーボンロッドができてからでしょうね、それまでは職人が竹竿を作っていました。グラスやカーボンで竿が作れるようになると、それまで竹竿を専門に作っていたメーカーも、グラスやカーボンの竿を量産するようになりました。

その時点から、釣りを味わうということが忘れられるようになったんじゃないでしょうか。釣りの味"ってものはそれぞれ感じ方が違うと思うんですよ、食生活みたいなものでね。その味を追求していけば、竹竿は廃るはずがない。ところが、それがそうでなくなってきたんですね。今流に言えば、いつのまにか味を追求するグルメ志向から"満腹主義"になっちゃった。とにかくお腹がいっぱいになればいい、という具合に。

作って売る方も、一度量産したものをさばき、さらに新しいものを量産してそれを消化していかなければならぬ。それがどんどんエスカレートしていく。そこには釣り味を追求するという考え方はないですね。でも、そうやってメーカーはずいぶん儲けたようですね。

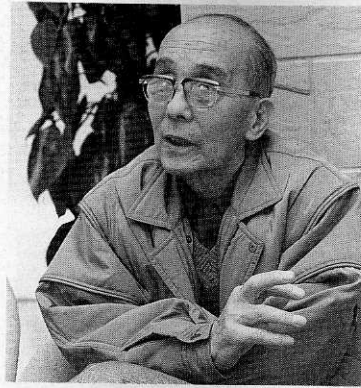
——かつて日本の釣具メーカーが最も景気がよかったのはいつごろなんですか？

五十嵐 昔、日本テレビの「HPM」という番組がありました、服部名人と

いう人がでてましたでしょ。そのころでしょうね。でもね、釣りが一般的になるといったって、道具を数多く売るために品質を落として値を安くするというのは逆行だと思えますね。

釣り道具というのは趣味のものでしょ。例えば日本茶でも、いいお茶を飲むに名器で楽しめればその方がいいでしょ。確かにプラスチックの茶碗だつて酒もお茶も飲めます。でもお茶が趣味ならば、茶碗もあてもないころでもない、こだわった方がおもしろいんだと思うんです。自分なりの最高の味を求めるところに楽しみがあると思うんです。

タナゴ釣りの場合だと、今でもカーボンの竿はないんですね。あれは小さな魚ですから、カーボンではどうにも味わえないんですね。仮にカーボン竿ができて、タナゴを釣って楽しもうとする人たちは、カーボンに対しての拒否反応の方が強いでしょうね。



名人はいらない

——今の風潮ですと、釣り全般において、人より多く釣る人がもてはやされる傾向がありますが、どう思われますか？

五十嵐 だいたいですね、オレは名人だなんて思ってる人の話はおもしろくないですよ。いやね、私は長年釣り道具屋をやってますから、それはずいぶん経験してるんです。そんな話を聞いていると、釣り道具屋をやるためにはこんな話を聞いていなくっちゃいけないのか、なんて気になってましたね。

——長く釣り道具屋さんをやられて、お客としての釣りの印象は変化するものですか？

五十嵐 そんなんですよ。確かに、釣りは魚がウンと釣ればいいってもんじゃない、そういう考え方もおられますよ。例えば自然を大事にして、魚を愛護して、あ、でも愛護っていうとキザなところがありますねエ、とにかく魚を釣るんだから。最終的には魚を殺すことにつながるんですから。でもどのへんで釣りと愛護をつなげるか、それが考え方だと思わうんですよ。そういう謙虚な考え方もった人がリーダーシップをもってくれるんらしいんです。

ところが、一般的にはやっぱり、いっぱい釣った者が名人なんだ！ とい

うことなんですね。そのいっぱい釣る名人という人は、たくさん釣ることに生命をかけてるような人なんですね。だから人が釣れてないと、先生づらして余計な干渉するんですよ。例えばアユを釣っていると、あつ、そこはダメですよ、あつちの方が釣れますよ、もっとこうしなきゃダメですよ、なんてね。こつちはうるさいなあと思いますよね。余計なこというな！ という感じですね。釣りがみんな同じようにこういう名人に対して、うるさいなあと感じるようになれば、もう少し事情がよくなってくるように思うんです。

しかし昔から名人になりたがる人が多かったですね。

——アユといえば、最近の友釣りは昔とずいぶん様子がかわってきてると思わうんですが？

五十嵐 最近テレビ番組などを見ていても、みんな魚をゴボウ抜きにして釣ってるでしょ、そうなつてくると、みんなそれをマネするでしょ。自主性がなくてですね。でもね、名人といわれる人がいると、どうか教えてくださいて、人もいるわけですよ。それを見ていて、ナンダアレハと批判するような人がもう少し増えないとね。

メーカーも競争釣りをイベントとしてやってるでしょ、竿も長い方が有利ですから、軽いカーボン竿からどんどん長くなつてくる。竹竿ではどうにもな

らない長きをはるかに超えていますよ、10mとか12mとか。12mの竿でアユ釣ってもおもしろいわけがないですよ。だげど魚を余計に獲るといふ発想からすると、こうなってくるわけです。隣の人が10m使えば、オレは12mを使う、となつてきますよ。アユの友釣りも早いうちから竿の長さの制限をしておけばよかつたんでしょね。例えば伊豆の狩野川あたりでいちばん使いやすいの4間1尺(約7.6m)だとすれば、それ以上の長さはダメ、とね。

それにしても釣人もメーカーも、ただ人より多く釣ればいいという志向です。どうしようもないですな。NHKの釣り番組を見ても、趣味の釣りとは違うもの、話を聴いてると、ちゃんとした考え方をもってないようですね。

最近はやつてアユをゴボウ抜きしてタモに受けるのも悪いとはいませませんが、あれじゃ様にならないですよ。あれがカッコイイんですかね。

——確かに新しく開発されて登場する釣道具類は、いかに簡単に魚を釣ることができると、あるいはいかに数多く釣ることができるといふ線にそつてますね。

五十嵐 それにね、釣りの多様性がなくなつてきてますね。例えば残念なこと、タナゴ釣りやヤマメ(オイカワ)釣り用の竹竿は竿屋も作らないし、

作つても売れない、というところにきつてます。ハゼ竿もそうです。あれだけハゼを放流して豊漁になつても、ハゼ竿は売れませんよ。中通しの竹竿で釣るおもしろさを知らないでしょ、今の人は。カーボンと竹竿を2本並べて釣つてみると、あれはもうカーボンなんて使う気にならないですよ。数点でいえば、今はハゼを船から釣るにもリールをつけて投げて釣るわけですから、竹竿の方がいいというわけにはいきませんけどね。

だからハゼに限らず、ほとんどの釣りはもう「獲る」になつてます。魚を獲るんだつたら、漁師の道具だつたらそれでいいんです。でも、どこまでいつても釣りは「味わい」でしょ。誰だつて一度や二度は魚が入れがかりになつた経験はあると思うんです。しかしね、そのときカーボン竿と竹竿じゃずいぶん印象も違つてくると思ひますね。リールをつけてハゼが入れがかりになつたつて、おもしろくもなんともない。

フライ竿だつて同じでしょ、バンブーにもレナードやオービスがありますけど、それぞれ違つた調子がある。レナードも一時期はずいぶんもてはやされていましたけど、だんだん張りとかバネがかわつてきて、最後の方は少しおかしくなつてきた。竹竿でもいろいろの差があるわけですが、そういう差がわかるには、ほんとうに竹竿を

使つてきた人でないと……。和竿でもアユ竿を作つている島田汀石^{しまだていせき}という人がいるんですが、こういふちゃんなんですけど、あの人の竿と他の人の竿はずいぶん違いますね。汀石さんは火入れがうまいんです。レナードの竿だつて年代によつて案外違いがあるでしょ。アユ釣りの人でこだわつている人は汀石さんの竿を選び、フライの人ならある年代のレナードを選ぶというように、今古東西を問わず、釣りに対する感じ方というのは、竿に対する味わいや違いを求めるといつたところで共通してるんじゃないですか。でね、釣りに対してそういう味わいを求める人が増えれば、日本の釣りも少しはよくなるんじゃないですか。

釣りがパチンコと同じになつてきた

——釣具業界にも組合があつて、釣りそのもののPR活動とか、釣り場をどうするとかもその場で話されてきたと思ひますが？

五十嵐 昭和33年ころだと思ひますが、私が実行委員長をやらせていただいて「釣りの祭典」というイベントがありました。東京中日スポーツ新聞がタイアップしてくれましてね。ヘラ釣り、フライ、投げ釣りなどいろいろな分野のベテランの方にお世話になりま

した。それがキッカケになつてそのイベントは何回か続きました。けつこうお金もかけましてね。そのころは景気がよかつたんですね。問屋さんへ寄附を集めにまわつたりもしましたが、最低5万円はだしてくれました。そのころの5万円ですからね、いかに景気がよかつたかということですよ。

でも今思ひますと、その頃から魚の放流などは、このままでいくと自然の魚は少なくなるから、放流して魚が尽きないようにすれば釣り人も増えるというような考え方があつたが、それがそのまま続いて、魚を放流さえすれば釣れる、釣ればいい、というようになつてますね。当時は釣道具屋も少なくなつたですから、それでもよかつたのかもしれない。まだまだ釣りというものが忘れられていたような時代でしたし、地方へ行けば釣りをする人間なんて怠け者だ、くらいに思われていた時代ですからね。でも、魚が釣れるように放流したことが、けつきよく、放流でもなんでもいいからとにかく魚が釣れさえすればいい、というようになつてきた。いつのまにか、釣りがまるでパチンコと同じようになつた。だからね、何度もいうようですが、数をたくさん釣る人が名人だとか、とにかく釣ればいいという考え方をなんとかしないとダメですね。メーカーにしても、この道具を使えば簡単にた

くさん釣れますという考え方をこのまま続けていくのは問題があるでしょうね。たくさん釣る人はいなくていいんです。で、これは私がもう釣道具屋をやめたからいえるのかもしれませんが、これ以上むやみに釣り人が増えない方がいいと思うんです。このへんで釣りを少し減らすことを考えて、そこから再出発しないかどうかにもならないんじゃないですかね。

その点ね、フライをする人は多くないですが、もともと数多く釣ろうなんて人が少ないわけでしょう、だからフライは今でも残ってるんだと思いますね。——釣具業界だけでなく、釣り雑誌や新聞なども含めて、何か気になられることはありますか？ 本誌も釣り雑誌ですから、エリをタダしてお聴きします。

五十嵐 いやあ、釣り雑誌はもう売れてないんじゃないですかね、私には数字はわかりませんけど……。アレ買って読もうって気になりませんよ。こないだも久しぶりにアユ釣りに誘われました、そのときのことがある雑誌に載りまして、どなたかが載ってますよと教えてくれたんで、久しぶりに買ってみました。でもそれ見たら、こんな雑誌買う人いるのかな？ と思っちゃいましたね。

少なくとも多獲主義をなんとかして、数多く釣る人を名入みに扱わない

ようにしていかないとダメですね。そしてこれから釣りをどうもっていったらいいの？ とか、ほんとうの釣りの味わいを楽しめるようなものにしなとね。でもね、雑誌にしても商売ですからね、そうはいっても無理でしょうね。

少し前にもね、ある業界新聞にこんな記事がでてました。釣り人口を増やすためにメーカーから道具を寄附してもらって、ある釣りで無料で釣道具一式を一般の人たちに借す催し物をやったところ、希望者が多くって、たちまち定員がいっぱいになって、参加者は拍手喝采で喜んだというんです。私はその記事を見て、もうなさげなくなりましたね。釣道具屋だって商売ですよ、タダで道具を借して、タダで釣らせて、それが盛大だったなんて、これを釣り業者が見ておもしろいわけじゃないですよ。生産性がまったくないですもの。それでなくたって今こんなにブアな業界でね、そんなことをとりあげてね、もうなんだかわからないですね。もちろん、業界紙の方は、メーカーなどのスポンサーをもちあげるために「盛大だった」と書いたんでしょうけどね。

——五十嵐さんは、以前から釣道具屋は企業じゃなくて家業だ、とおっしゃってましたね。

五十嵐 釣り業界は前から小さな業

界だったんです。それをね、いつのまにかゴルフだとか何だとかの業界と同じようにやりはじめた。それじゃダメなんです。妙に一般化してスポーツだとかゲームだとかいって……。それじゃ逆行なんです。スポーツとかゲームだとかいう意味をとり違えると、つまらないことになっちゃいますよ。

これからの時代は、ますます人の暮らしの中で、本来の釣りの楽しさみたいなものが最良のストレス解消になり、より一層求められてくると思うんです。最近では眠れない人が増えるようだしね、仕事のストレスで。それなのに、いざ釣りをしたらこれが競争釣りで、そこでも競争みたいなものがあったとしたら、とっても休むことになりませんもの。聴くところによると、ヘラブナ釣りの競技会に出場する人などは、大会に出る前日から水を飲まないようにするらしい、トイレに行かなくてもいいように水断ちするんですね、勝つために。そういうのはその人の勝手と、いえば勝手です。しかし、そういう風潮が他の釣り人にも影響するようになったら、たまったもんじゃありません。今、世の中は財テクとかが盛んでしょ。日本はああいう感じでどんどんいっちゃってる。釣りもああいう感じと同じ波に乗ってたら、たまったもんじゃありませんよ。

釣りというのは個人プレーでしょ、

誰にも縛られないでんびりできるよんでなくっちゃいけません。何か妙に一生懸命やって、一生懸命釣り場や魚を食いつぶしちゃいけませんよ。釣道具屋もメーカーも、妙に近代的になって、企業意識みたいなものをもっちゃいけませんよ。少なくとも釣道具屋は家業ですよ。

でね、いずれにしましてもね、人と自然と魚がうまく調和して、その中で釣り人も調和を考えていかないと、将来的には釣りはダメになる一方でしょうね。それに釣具業界関係者もこのあたりで考え方をかえないと、業界そのものが滅亡しちゃうんじゃないですかね。そう思います。

(1988年10月29日 東京・大崎にて収録)

▼アフター・インタビュー

五十嵐さんのお話によると、歴史ある日本の和竿師たちは今、消滅寸前にあるという。かろうじて存続している方たちも、「伝統工芸師」の指定を受けてやっと仕事を続けている。本来実用品であるべき釣竿が、こんな形でないと続けられないことに、五十嵐さんも底知れぬ憂いと悲しみを感じておられた。ただ古いものが消えるというのではなく、その背景が問題なのだ。高度な文化をもつ日本の釣具業界の一端が壊れようとしているのだ。釣り人は知らず知らずのうちに自ら趣味の分野まで画一化し、自ら選択の幅を狭くし、同時に釣り場までダメにしていることを知る必要がある。道具を選ぶのも釣り人なのだ。(中)